

# 不登校生徒の親面接

## —スクールカウンセリングをmanagementして—

奈良文化女子短期大学 幼児教育学科 国松清子

### 1. 始めに

文科省はスクールカウンセリング事業を平成7年度より開始、すでに10年を経過した。我々としては、少しづつでも実績を積み上げていくべき時期にきたと考えている。筆者は初年度より、一貫して中学校や高校での経験を重ねているが、やはり、手探りで始まり、学校側も我々も戸惑いながらの取り組みであった。これは、我々臨床心理士側と、他領域の専門家（医療、福祉、教育等）との連携や協力といった問題とも深くつながった問題でもあり、筆者は児童相談所等での経験がそういった意味で大変役に立った、という実感を持ったし、これを支えたのがD.W.Winnicottのmanagement技法であった。精神力動的、精神分析的理解を支えに、関連領域の人との連携、協力を得、さらに家族をもその中に位置づけていった。複雑ではあるが、クライアントを治療し、助けるための必要度がその中心にあって、関連の人々にも理解と援助を届け、大きな器でクライアントを支えるものである。学校内でも、この方針で自分の動きを見出していった。これを、「“management”としてのスクールカウンセリング」と題して1996年に論文化した。今回は実際の事例を取り上げて具体的に展開を試みた。本大学での教職を務めながらも、筆者が一貫して研究を重ねてきた領域でもあり、ここに実践報告としてまとめたものである。

### 2. 学校の中へ

個人への援助者として、大きな学校組織の中でどうやって位置取るか、がまず考えられなければならない。さらに、親や生徒と日常的に接触が行われている所での守秘義務の課題もあるわけで、まずは学校側と話し合った上でのルール作りが出発点となった。筆者が面接等で得た情報の守秘は拡大されて、必要なだけ、担任や関係者にまで伝えられるが、それは決して直接の指導等に用いられるはず、クライアントとしての生徒や親を理解するための材料である、とした。それらが守られる中で、面接を実施し必要な理解と協力を得たのである。

### 3. 事例の紹介

クライアント： 中学2年生の男子（14歳） A君の母親Bさん

主訴： 不登校

家族： 父（46歳 技師） 母（46歳 主婦） 長兄（19歳 高校中退 就労）

## 4. 生育歴

活発で体格がよく、幼児期よりすぐ手が出るタイプ。幼稚園では、子どもをよく泣かすこともあり、いじめる、と言われたこともあった。小学校では、やられるとやり返し、黙ってられなかった。ちょっかひもよくかけられて、もめた。仲良しであった子ともよくもめていた（3，4年）。特に、5，6年であったクラス内のいじめに加担せず孤立し、乱暴などもあって、やがて下校後は外に出かけなくなった。当時はいじめ問題でクラス全体の問題となり、年度途中で担任が交代した（5，6年）。

もともと、幼い頃から一人で遊んでいても平気な子で、こんなものかと思っていた。中学生になって、バスケット部に入部、足を痛めて休むようになってから、部員ともめだす。小学校5，6年当時のメンバーもいて、どうにもできないで学年末には退部届けを出す。部員との間で「騙された」と母親にもらす。

## 5. 学校からの情報

外見は元気で活発な生徒であるが、人に言われたことなど我慢して心に溜めていくタイプであり、外から見ても、不登校の原因がわかりにくい。小学校より友人とのトラブルが多く、いじめもあったと聞いている。

## 6. 初回面接から方針が出るまで（#1～#4まで）

（スクールカウンセラーはSCと略記）

初回（一学期修了間際）は、担任同席の上、担任から紹介を受けて聴取、以上の情報を得る。主にBさんが発言、小学校の時から担任不信（いじめ事件等）など涙ながらの訴えから始まったので、現担任は静かに黙って同席しているだけであったが、A君への理解は増したようであった。以後は母親のみの面接を原則として週一回、一時間続けることになった。#2から#4では、不登校の経過が話された。2年生になって、パソコン部に入部、楽しみにしていたのに6月くらいから次第に機嫌が悪くなっていき、朝も出渋るようになった。間もなく、行きたくない、と休みだす。家ではほとんどゲームをして過ごし、買い物も母親に頼んで自分は一切外出しない生活となる。十日間に一度くらい、気分の浮沈によってか爆発することがある。得意に思い、好きでもあった数学もやりかけては怒り出し、それからは一切しない。SCから、担任の思いを伝える。A君はそれまでは全く元気に登校していたのでどうして学校に来なくなったのかわからない、戸惑ってる、と。Bさんは早速A君と、このことを話し合ってみたそうで、「笑顔でない」と悪い」と担任に気を使っていた様子が伺われた。Bさんも、同様に感じられたようで、一方では人に気を使う子だと不憫がる。また、A君が父親をひどく馬鹿にしているの、Bさんに夫のことを尋ねたところ、「子どもみたいで、帰宅するとチャンネルを独占してしまうし、食事も

全員が揃うのを待ちきれず、真っ先に手をつけてしまう。兄たちが様ざまな問題を起こした時も何も役に立たなかった」とBさん自身の夫への怒りや不満が続出した。どうやら、A君の父親への態度は母親からの強い影響があつてのことと察することができた。A君自身、父親とゲームをしても、父親が勝手に遊んでしまい、つまらない体験もしている。A君は、Bさんにはお茶を入れて欲しい、とか何かと頼みにくるので疲れる。全部私に言ってくる。父親とも兄たちとも口を利かないし、話があつても母親に言わせる。とA君の不満を言ってるようでありながら、A君を不憫がって涙にくれるAさんであった。

## 7. 最初の段階での、学校側へのメッセージ（学校側に求めた理解）

- ・知的な作業（勉強等）に必要な集中力や忍耐力は今は弱くなり、ゲームで時間を費やしている状態である。
- ・家庭生活での人間関係は母親とのみ保たれているだけで、外出もなく、引きこもり状態が顕著である。登校の期待は薄い。
- ・引きこもりと不登校への罪悪感で身動きが取れにくくなるであろうと考えられ、家庭内で、より楽に生活ができるように母親と話し合いながら工夫を重ねる。
- ・登校は当分触れない。母親には食事や睡眠などへの配慮を重ねてもらいながら、A君が安心して何か楽しめるものを見出す努力を続ける。
- ・状況を見て、A宅へクラス生に遊びに行ってもらえるようクラス運営を。

## 8. 治療方針としての仮説（SCとして抱えていたもの）

母親BさんとA君とは家庭の中でも、外（学校）に対しても、自分たちは理解されていない、それよりも手荒な仕打ちを受ける、自分たち以外の人は間違っているのでは、といった共通の思い込み？に似た感情に捕らわれている、と考えられる。現実を受けたAのいじめ体験等については、親子共にしっかりと受け止められ、理解されなければならないが、周囲の人間関係まで閉じてしまいそうな、病理的側面については、もともとのA自身の育ちにまで立ち返って母親と共に話し合い、治療されなければならない部分である。この捕らわれから自由になって、初めて家族や周囲との関係に思いを至らせることも可能になるであろうから。

## 9. 以後の経過のまとめ（「 」内の発言はA君、あるいはBさん，“ ” SCの発言である）

原則として、毎週一回、一時間の面接を20回実施、21回から23回までは月一回となる。母親は訴えたい思いで必死で通われた。

#5～#7（2学期半ば）

Aは、最近通院し始めた病院のDr.に「母親からあれこれいわれるのは嫌、放っておいてほしい」と言った。私も今はそうした方がいいと思いたい。以前もそう思って、Aが中一の2月になって、Aとの

距離をつくらうとしてパートに出た。何とか慣れたし、このままの調子では続きそう、と自分では思ったけど、Aがこのようになってしまって辞めた。あれからクラスの子達が1, 2回遊びに来てくれたけど、本人は非常に興奮していて、うれしいのか、無理しているのかよくわからない。

SCから、それでもクラス生の訪問を続けようと提案、クラスとの接点になるからと。

病院では私のことをうるさいように言ってるけど、家では相変わらず、すねたり、イライラしたりで、私もあの子には腹が立ってくる毎日、と涙。ゲーム三昧の毎日であるが、中学生が一般的に楽しむようなコミックやCD、ドラマにはあまり関心もなく、どうやら、人間関係だけではなく、他の関心事も狭いのかな、と話し合う。それに気がついていただけ、それより小学校の時のいじめから、登校は続けたけど誰とも遊ばない期間が長く続いて、最も友達関係が一杯できる時にうまくいかなかったせいであると、と当時のできごとへの怒りが噴出、涙にくれる。

#### # 8～# 9

クラス生が最近来ないことを気にしてる。何となく待ってるように思う。いじめ事件のテレビの報道を見て、「僕は3年間もあったのに、一ヶ月程度のいじめで死ぬなんて」とA。Bさんもすっかり同調して、母子のうらみ？は減少することなく続いている。

この試験休みにはクラス生が6人も来てくれて、本人は興奮してはしゃいでいる。無理してるみたいだけど、一方で楽しかったんじゃないかと思う、やっぱり来てもらうのを待っていたみたい。兄たちがいても、長兄は、何を情けないことを言うのか、と引きこもっているAにづけづけ言うだけだし、次兄も同様なので家では本人は兄たちを避けるのみ。次兄などは、中学校というところは最高におもしろい所で、好きなことできるし、満喫した、休むなんてもったいない、という考え方。

しかし、兄たちようになってしまっただけとはいけない、という思いから、母親は兄たちとAとを分けて考えているような様子がある。かつては、兄たちは学校生活などでルール違反をしたり、暴れたり、あげくは暴走族と行動を共にして母親を困らせ、問題ばかり起こしたかも知れないが、今は長兄は懸命に働いているし、次兄も高校生として逸脱しているわけでもない。次兄はさらに専門学校に進学して将来を考えているし、今は二人とも真面目である。そのような兄弟はAにとって、同姓としての格好のモデルには違いない、もっと兄たちとしゃべったり、遊んだりできたら、とさらに話し合う。Aにすれば、暴走族など母親をはらはらさせたのを見て、ああはなるまい、という姿勢を固めたのかも知れない。Aは、二人の兄に、「ああなれたら楽でいいわな」と母親にこぼしている。

ここにも母親との共同歩調があると考えられる。

#### # 10～# 11

2学期の終了を向かえ、「見通しは全くないです」と涙。SCから、もうこうなれば、登校するとかしないとかでAともめたりして、母親自身苦しむのは一端置いておかないか、と提案。母親もそうは思っています、と。しかし、一方で、3者懇談の日、クラブがあれば行きたいとAが言うと、クラブ顧問の先生が計画をして下さってAは久しぶりにクラブだけに参加、登校した。その後3学期からは登校できそうだと母親にもらしたそうで、それで、すっかり母親は希望につつまれている。SCから、そうならばよいけど、そうでなくてもがっかりしないように、まだ3学期になってないから、Aは登校を口にしたただけかも、というハッとして「本当にそうですよね」。冬休みは友達との遊びで楽しむことが

できるといいね、と助言。

#### #12

今日の3学期始業式登校できなかった。朝は起こしてくれと言うので、起こすとずっと起きて朝食も勧めるまま食べる。しかし、その後部屋にこもってしまい、登校の時間に声をかけても、「やっぱり行けない」とA。それならいつものように身支度して下りて来なさい、と声をかけておくと、しばらくして普段着に着替えて下りてきた。今はまたゲームしていると思う、と肩を落とした母親。SCから、「今までのように、Aを責めたりしないでよく流してあげましたね」と母親の我慢を取り上げると、「下におりながらも涙がとまりませんでした」とまた涙にくれる。次兄がこの頃Aに話しかけてくれる。今日もAに「どうして行けなかったのか」と聞いてくれて、本人も「どうしてかわからない」と素直に答えている。少し前ならこのような会話は成立しなかった、と思う、Aも少し変わってきたかな、と感じる、とBさん。今までは、何でも母親に頼んでくるのでつい喧嘩になることが多かったが、今朝、「背中搔いて」と言っていたのに聞こえなくて、Aはふくれていた。しかし、放っておいて、夜になってから、「どうしたの?」と聞いてやると、「頼んだのにしてくれなかった」と説明し、お互いにかつとすることもなかった。Bさんの方もAの態度に巻き込まれることなく、見ておれたり、言葉で解決できるように働きかけるようになっている。

#### #13

「何も変わらないです」と開口一番。最近の家でのAの落ち着いた態度にカチンとくるものがあるらしく、それでこのような言い方になったのね、とSCから説明を加えると笑い出す。しかし、Aは少し外出ができるようになったらしく、一人で買い物に出かけたり、退屈というAに、最近よく遊ぶようになった小1の男児に連絡を取ってやると、その男児宅へ出かけ遊んで帰ってくる、といった行動が現れている。又、テレビも子供なら誰でも知っているアニメをよく見るようになり、時には家族と一緒に見ることもあると家の生活に少しずつ変化が見えてくる。それを変化としてBさんにも伝え、一緒に喜んだ。

#### #14～#15

Aはテレビを見ようとして、リモコンがうまく働かないので乱暴に投げつけてしまった。それを見て父親が注意、するとAは「何も父親らしいこともしないで、えらそうに言うな」と反発。これには父親も激高、二人の取っ組み合いになってしまった。母親が止めようにも止められず、ちょうど家にいた次兄が止めに入った。そしてAに「お父さんは何もしないと言うけれど、何か買いたい時に車で連れて行ってくれるだろう」と、他色々と父親なりにしてくれた事など挙げて話し出した。「すぐにお父さんやお母さんのせいにするけど、一番悪いのはおまえだ、何も言わないで一人でひがんでいるのではないか、クラブのことも顧問の先生をよく知ってるけど、言えればわかってくれる先生なのに、何も言わないでわかってくれない、と勝手に思ってるだけではないか」「お母さんも毎日どんな思いをしているか知っているのか」と言う兄の言葉に耳を傾けていたAであったと母親は報告。この時父親も「次の4月からのことをよく考えておけ」とAに一喝。初めて兄が登場し、父親まで、Aをまともに叱責した場面であった。家族に生じた大きな変化であり、母親とこのことを取り上げて話し合ったのは言うまでもない。

#### #16～#17

あれからも相変わらず、朝は起きないし、ゲームばかりで「又、地獄に落ちたね」と言ってやりました、と笑う。しかし、母親の彼への言い方には責めるニュアンスは薄れており、母子のトラブルになっていない様子。クラス生が来るのを期待して待っているみたいでゲームなど用意してる。最近、担任が来てくれたけど、会いたがらない。一学期、登校を渋り始めた時に、家にやってこられ、「ちょっと刺激しますから」と母親を遠ざけてから、Aのほおを数回叩いた由。Aは小学校の時も、叩いても大丈夫と思われてか、やはり厳しく叩かれていて、どうもそういった目にあうらしい。Aは叩かないと分からない、と思われているが、それを一番恐れているのもAだと説明すると、Bさんもそれを理解できたようで、深く頷く。Bさんは今自分のために仕事を探し始め、生き生きと報告。Aもそれに関心を持って、母親の話に耳を貸すらしい。次兄も車を買いたいと必死でバイトに頑張っているが、Aはそうした話は全く分からないみたいなので、兄たちもそうした話をする事もない。ようやく、兄の話もよく出てきて、母親も兄たちのよさを認めてきているのがわかる。

#### #18

今はAも母親に不満をぶつけてくることも無くなって、楽になった。仕事探しのために毎日出歩き、年齢的にもギリギリなので何とか見つけたい、と必死。SCからも焦らずに、こつこつと続けてみようという励ます。Aとの物理的、心理的距離を作りたい、という母親の試みを支持。A本人は、母親に当たらなくはなったが、ゲーム以外の関心は何もないようで、何を誘っても駄目。散歩は嫌、テレビで釣りの番組を見ていたので誘ったが嫌、動物は嫌いだし、本当に何も好きなものがないのか母親自身もさっぱりわからない、とため息。Aは、今色んなことを考えて寝付けず、ともらしている。

#### #19

「何で俺、こんなになってしまったのか」とAはつぶやき、自分の今の状況を少し客観的に見えてきているような様子。終業式もどうするのかわからなかったのも、母親がただ、「明日で最後やね」というと、「そうか、そしたら行こうか」と言う。本当に行くのかしら、と思っていたら「そのとうり、行ったんです」とうれしそうな母親。

#### #20

春休みはとても元気だった、うるさいくらいにおしゃべり、外へも自分から出て行く。父親もAは変わったな、と言う。人の話をよく聞くようになった、と母親の印象。始業式も登校したので、3年生からはもう大丈夫です、と自信有りげな母親。もう、解決したと云いたそうな母親である。SCの方から、Aの現状を確かめると、まだ机での勉強に取り組めていないし、成績を気にしているAにとって、定期考査も待っているとしたら、登校への困難が十分考えられ、あまり喜び過ぎないようにと話し合う。しかし、母親はAの変化に自信を持ち、これからは面接は月1回にしたい、という申し出があり、決まる。以後、月1回の継続面接となる。

#### #21

先月に仕事が決まり行きだしている。昼の2時までのパートだし、難しい人もいない職場なので何とか続けられたら、とBさん。Aは新学期から時々休むけど登校続いている。体育のあった次の日はお腹痛い、と訴えたり、どの先生もAに気を使いすぎてかえってしんどい、と不足そうに言う。修学旅行もまもなくあるが、Aが頼りにしていたC君と同じ班にしてもらって本人は喜んでる。家に引きこもって

いた頃によく来てくれていた、D君やE君は同じクラスになったけど、今は頼りにもならないということもない友人たちらしかった。家では自室で一人でいても、くつろいでいる様子があって、兄たちも時々一緒にゲームをして遊んでくれている。Aは母親に自分の部屋を、いじるな、掃除するな、と立ち入らせないようにした。母親は、これには不満を持たれたが、Aの成長、発達の表れと見て、以前のように母親に頼ろうとするのではなく、母親に秘密を持てるようになってきている、と考えられるので、気をつけてあげよう、と話し合う。母親は、就労後生き生きとして見えるし、Aにも気を使わずに言いたいことが言える、楽になった、と言い、Aとの適度な距離が産まれているのが伺える。一方で、このように回復してきて、以前の小学校の時の担任や前担任への、Aをここまで追いやったという怒りが今もチラチラと見え隠れしている。自分は精一杯しているのに、それに気がつかない周囲への不満や怒りが今も強い。

#### #22

修学旅行は一切自分で準備して出かけ、満足して帰ってきた。定期テストも受ける。しかし、校外活動で足を腫らし、中一時にクラブで足を腫らして休みだしたと重なる。母親は手当てを勧めたり、受診を勧めたりするも、Aは断り、母親からすれば口実にしている、と感じられている。家では相変わらず勉強をしない、と母親は不安をもちます。

#### #23

3年生になっての初めての實力テストが230人中の130番であった。担任からは、後ろにまだ100人もいて、と励まされたと本人は荒れることなく受け止めている様子。先週くらいから、ようやく溜まったプリント類を整理、机の前に座りだす。ゲームはある程度すると自分から止めてしまい、前のように延々とやらなくなった。こうした状態を見て、母親は勉強への関心を持ち始め、本人の意向にかまわず、又何か家庭教師など手を打つ感じがあった。本人とよく話し合った上で、本人の希望に添ったことなら失敗も少ないだろうから、慎重にやっっていこう、と話し合う。

以後夏休みに入り、母親の面接の希望も無く、本人の学校復帰が確実になった段階で終了となった。

2学期に入ってから、体育祭や文化祭など、Aの苦手な場面が増えて、断続的登校（休んでは登校するを繰り返す）状態に陥る。しかし、次第にAの登校パターンが教員にも飲み込まれてきて、たとえ休んでも、待てば必ず登校してくることが誰にも了解されていった。

それよりも、担任をはじめ各教科担任にとって、彼の時々の適応の問題に頭を悩ますことが増える。

試験の時も、担任にしつこく不安を訴え続けた。「もし試験の最中にお腹痛くなったらどうする」「トイレ行きたくなったらどうする」等が続く。担任は、大丈夫と請合ってみたりしても止まらないので、その時はトイレに行かせてあげる、と約束、もちろん学校の規則では教室を一端出たらもう戻れないのである。そうして不安を受け止めてもらったからか、実際の受験に際しては全く何事もなく実施できたのである。また、体育祭での出場枠を決める際に、クラス全員で相談しあっていた時、クラス生がAに気を配って、あらかじめ軽い競技を割り当ててくれたにもかかわらず、Aはそうした特別扱いは嫌だ、皆と同じにしてくれ、と主張、しかし、担任はAの弱点として足の問題があり、不登校のきっかけにもなったことを考えて、生徒たちのやり取りに口をはさんだ。Aに、どうして思いやりを受け取らないの、

と指摘すると、彼はあつという表情をして、恥ずかしそうに仲間からの提案を受け入れた。困難な状況では大人が介入しなければ、Aは気がつかずに、自分のできないことまで引き受けたり、不安を一人で抱えてパニックに陥ったりしていたのである。担任を始めとして、周りの大人がこうした場面で手を貸すことで危機を回避できるようになったのが、登校が続いた要因である。担任や各教科担任への、Aへの理解を深めるためのSCからのサポートが必要であったのは言うまでもない。

その後Aは、疲れては休む、といったリズムではあったが、登校は途切れることなく、高校へ進学した。

## 10. 学校へのマネジメント

この面接の間に、様々な学校との話し合いがなされて、登校へ繋がっていった。当初は登校刺激を控えるように、とのSCの提案は意外に思われていて、特に担任は手荒な登校刺激を行っていた(#16)ので、特に話し合いが必要であった。担任の経験から、こうした生徒には一発手荒な刺激を与えると、大抵は学校に復帰していたので今回も当たり前のように、Aの頬をビンタしただけで他意はなかった。しかし、その後も一向に登校しないし、訪問しても自分からは会おうともしないし、母親からは恨まれているようであるし、今までと様子が異なっていると気がついた、と言うわけで、SCの判断に耳を貸して下さる様になったのである。それからは、学校との関係を絶たないように、学校からのプリントや諸連絡を届けることだけに配慮されて、母親との面接の経過を辛抱強く見ておられた。SCからも、担任に伝えておいた方がいいことは、時々伝えて、常に共同者としての意識を持ってもらえるように配慮した。例えば、引きこもりの状態を伝えたり(#3)、母親とAとのトラブルを伝えたり(#5)、担任のAへの疑問について答えたり(#3)してA自身への理解を持ってもらうように配慮した。Aは一見元気に見えるが、一方では気を使って元気を見せていたのである。これはAが母親に尋ねられてそう答えていた。一見と異なって繊細な部分を持っていることと、家にいて楽をしているように見えて、実は葛藤や不安から母親と絶えずもめごとを起こしていて、決して楽しく在宅をしているわけではない事、などを伝え、不登校の原因は怠け、というより別にあると考えられる事に気付いてもらったのである。担任はここでようやく、待つ、という姿勢を持つことができた。

そして、ようやくAが退屈感を滲ませるようになってきた頃に(#6)、担任に働きかけてクラス生を寄越してもらおうようにした。担任は誰を寄越そうか、思案されたが、大人が依頼した形ではどうしても、不自然だったり、義務的な関わりになったりして失敗を生じることがあるので、自主的に行ってくれる生徒を募った方がいいと助言。すると、自分も登校が危なかった生徒が名乗りをあげて、その友人との二人で彼の家を訪れたのである。Aは驚いた風でもあったが、喜んでもいた風で共通の趣味であったゲームを一緒にして盛り上がったようであった。(#7)母親から見れば喜んでいいのか、無理してるのかよく分からない様子であったらしいが、それでもその後、又来てくれるか気にしている様子に、意を強くしてクラス生の訪問を継続したのである。

Aがクラブには行きたい、と言い出した時、担任にこの事を伝えると、クラブ顧問に依頼してAの為にクラブ活動を実施、参加した(#11)。この日だけの登校に終わったが久し振りに校門をくぐった。(2



年、2学期末)

次に重要であったのは、3年生になって、Aが登校し出してからのことである。A自身、幼少時より、一人遊びが好きであった、とか、小学校に上がってから友人と遊びだしていたがよくトラブルになっていたし、特に暴力沙汰になりがちであって、よく叱られたことがこの親子の根強い不満になっていったようだ。母親は本人に何も抵抗するなと教え、しかし、彼も我慢が切れるとさらに暴れて悪循環に陥っていった。ここで、母親も本人も自分は何も悪いことは無い、相手が悪い、といった被害感情を募らせていったことが、ここまでこじらせてしまった一因と考えられた。A自身のこうした性格や傾向は当然のように、集団適応には困難をもたらしていて、この点についても母親と話し合ったが、日々接する教員にとっても必要なものであった。Aの理解しがたい言動や無理と思われる行動には、SCからのコンサルテーションによって理解を得られれば、対処は可能であり、それが再発を防ぐ重要な部分でもあった。学校での不適応が前回も引き金になっていたのは間違いなく、復帰したとはいえ、まだAの弱点は温存したままであったから、学校での集団生活からA自身が無理をしなくても自然に行動できるようになることが望まれた。これらを実際的に助けるのは、担任を初め、各教科担任である。従って、元気に見えても実際はまいっていたり、できないのに、自分も引き受けないといけないと無理をしてしまう傾向があること、自分も発言しなければいけないと、ちょっと的外れでも言わずにおれなかったりすること、など、これまで、間違った発言であるとか、自分で言いながらやれない、とかで叱責を受けがちであった部分について見直し、彼なりの適応への努力と見なし、ただし、間違っていることが多いので、叱るのではなく、修正を加えてやる、といった働きかけに変える、など、教員と話し合っていたのである。こうした、学校側の努力と何より、A自身の登校への強い気持ちが登校の継続を支え、進学へと動かしていったのである。

## 11. 面接経過からわかったこと

彼自身は幼少期から、社会性の発達に問題があったと推測され、母親がこれに気がつくことなく、生じたトラブルの結果にとらわれてしまったことから始まっている。母親は友人間でのトラブルには、彼が何も反応しなければいいのだろうと、無理のあるしつけをしようとしたが、彼は当然無理はできなくて、友人に対抗したに過ぎないと思われるのである。母親のいうように、何時も彼は何もしていないのに、彼が一方的にやられ、我慢しきれずやり返して、叱られるのは彼だけ、というような現象ばかりであったかどうかは、わからないし、もし、そうだとすると、彼なりに自然な反応、つまり、止めてくれ、とかの相手への行動があっても何も不思議がないのだが、母親はこの指摘には驚いて、とまどってしまうばかりであった。この時に母親から、小さい時から一人遊びが好きで、口下手だったことが語られ、SCからのこの質問によって、始めて母親がA自身に目を向けるきっかけになっていった。以後、兄たちへの無関心や、引きこもってしまっても、彼自身会いたい友人の名を挙げることもできず、友人関係の貧しさを露呈、又、ゲーム以外にはこの年代に共通するような関心事もなく、同性間の交流がいかにも乏しいものであったかを母親も実感するところとなった。そこで、クラス生との交流が仕掛けられ、母親も重要なものと意識してその様子に注目してSCに報告するところとなった。これをきっかけに、

冬休みには、同級生の弟、小学生と親しくなって、よく遊ぶようになった。彼なりに誰かと遊びたい、という要求が生まれ、遊びを楽しみにし出している様子が母親から語られている。そして、同性の兄弟同士交流もない、という不自然さを指摘した時から、母親も兄たちを見直し始めた。母親自身が兄たちを悪い見本として考えて、兄たちの存在を疎ましく思っていたらしかった。しかし、現在はそれぞれに自分のすべきことやしたいことに努力を傾けてがんばっていることに気がついて、ようやく、兄たちと話をするようになり、Aの困った状態についてももらしていったようである。こうした背景があって、とうとう、Aが父親とぶつかった時、在宅していた次兄が二人の間に入って、Aをいさめ、母親のつらさまで代弁している。この時にはA自身も兄の言葉に耳を傾げるくらいの、兄との交流も生じていたので、兄の話をまともに聞けたようであった。はらはらして、側で見ていた母親がそう見ていたのである。それはそのとうりであったのが、その後の面接から十分うかがえた。母親もAとのトラブルが、自分の態度と関係していると気がついてきて、彼のイライラにすぐ反応して叱ったり、なじったりするのではなく、できるだけ感情的に反応しないで「どうしたの」といった、間を置いた、客観的な姿勢を取ることで、彼のイライラに巻き込まれず、側にいてやれる人として、彼への援助者になれるべく努力を重ねていた。そういった意味では、熱心に面接に通い、SCの指摘に対して一生懸命に答えて頑張った母親でもある。その結果、A自身も母親と距離を取ることができるようになっていて、母親が彼の要求に直ぐに応じられなくても、怒ったり、すねたりすことが減少して、時間を置いてから母親に改めて要求をしたり、説明をしたり、できるようになっていたのも、彼は次第にこの困難は自分自身のことであると認識を始めたようであった。「なんで、俺こんなになってしまったのかな」とつぶやいたり、家族の話もよく聞くようになったり、これまで何も気にしていないように見えた母親の、自分の部屋の出入りを「いじるな、掃除するな」と禁じたり、母親との適度な距離を作ろうとさえしている様子が伺えるようにまでなったのである。ようやく、母子密着のからみから脱却して、彼自身の思うところをやり始めたわけである。

## 12. 考察とまとめ

### 1) 不登校への原因—母子密着

Aと母親との密着した関係が他の家族を遠ざけ、さらに外側の人々（学校の教員や友人）に対しても、Aを理解しないで厳しい仕打ちだけをする、といった幾分強い感情に見舞われていたことである。これは、兄達が中学校時代にとっても荒れて、父親が何も役に立とうとしなかったことや、あるいは当時の担任の指導にも腹を立てていたこと、などからAを兄達から遠ざけて悪い影響を受けないようにしたり、父親も批判の対象として、Aにも同様な姿勢を意識してではないにしても持たせてしまっていたものと考えられた。こうして二人で孤立していった経過があり、それは同時に二人の苦しい関係の始まりでもあった。Aは全てを母親に持ち込んでくるので、母親は次第につらくなって行って、逃げるように働きに出たものの、間もなくAが不登校に陥ってしまって辞めている。Aにすれば、母親しかいないのに、母親が他に關心を持ってしまって文字どおり孤立感を深めたと推測され、登校へのエネルギーを無くしたと考えられる。

この家族間の分裂の修正が必要であったが、まず、Aにとって身近な同性の仲間としての兄達との交流を得て、同世代からの様々な刺激を得ることができること、父親との関係も実際的な認知（彼のために色々動いてくれていること）を得て、もっと普通の関係を取り戻すことが望まれた。さらに、Aと母親との関係も密着しすぎて息苦しいものに陥ってトラブルになりがちであったが、互いを冷静に見ることができる関係に修復する必要がある。さもないと、いずれ、彼の不平、不満は母親に集中しかねず、母親への暴力として現れる危険性があった。毎日の小競り合いに母親も疲れ切っていたのである。

## 2) A自身の成長、発達を助ける面接技法

今回は、不登校生本人ではなく、家族、特に最も本人に対して影響力を持つと思われる母親を対象にして、本人の登校を実現するための面接を行った。母親は当初、自分自身の胸の苦しさを吐き出すように語っていたが、自分が落ち着いてくると、本人を観察できるだけの余裕を持ち始めた。ここで、SCとして、母親をしてAの治療者の役を果すべく課題を与え、母親もそれに応えていった。二人だけの関係に行き詰まっていたので真剣でもあった。彼の荒れや不平、不満に直ぐ反応するのではなく、黙ってみているだけ、それでも側にはいる、といった役割を取れるようになっていったので、彼は母親に様々な要求や不満をおつけても感情的にならない母親を目の前に見ることになる。又、兄達を見直していく作業の中で、兄達に彼との苦しさも漏らしていき、頼りにさえ思っていく。こうした母親の変化が家族を動かし、彼にも強く影響を与えていった過程が読み取れる。彼も接近してくる兄達と会話を交わすようになったり、兄達とゲームを楽しんだりできるようになった。そして、兄達の世界、バイトや女の子とのデート、買い食い、CDの楽しみ、などに関心を寄せていった。父親とは、劇的なぶつかり場面があったお陰で、又、たまたま在宅していた兄のお陰で、父親の存在を認めることができるようになっていく。面接の終了頃にはすっかり父親と仲がよくなった、という報告すらあった。こうして、まず、母親とだけの世界から、兄達との共通の世界へ、さらに父親の思いやりを受け止め楽しむようになり、母親とは、自ら距離を取るようになった。ようやく、思春期を迎える準備ができてから、彼は登校を始めたのである。この場合、目的が本人の登校であったので、直接の対象者であった母親についての問題（外へ問題の責任を持って行き易い、被害感情を持ちやすい、など）は、あまり焦点化されることなく、本人が登校を始めた段階で修了した。本来の心理面接では当然取り上げられるテーマであるが、学校で行われる心理面接には、目的が異なるとこうした限界が生じる。再発を防ぐ意味では、母親の外へむけられるこうした傾向は修正されることが望ましいのはいうまでも無い。

面接技法としては、目的が母親自身ではなく、子どもの学校への復帰にあったため、母親にそのための役割を与え、それによる変化を母親の情報から確認していく、という作業となった。このために、母親には指示（提案という形ではあったが）や課題を与え、それを母親が懸命に実行していく、といったプロセスと、母親自身の気づきを促進するような働きかけをして、母親の認知を修正したり、変えたりする手伝いもおこなった。そして、必ず、母親と共に考え、共に歩みを進める姿勢は変えなかった。母親自身への治療面接ではなかったため、こうした工夫が必要であったし、今後も代理者を通じてのこうした援助法については検討が望まれる。

A自身の発達を省みれば、母親との2者関係に閉じられた状態に留まっていて、エディパール段階に

までは達していなかった、と考えられ、とても3者関係の世界へは入っていけないと思われた。母親との距離が生まれて、ようやく、母親との分離固体化を果たし、学校という3者関係の世界へ飛び出した、と言ってよい。しかし、一方で彼の人格発達としては、超自我に頼った無理のある適応方法しか身につけておらず、学校生活の実際は破綻をきたしやすいままであった。そこで、担任を始めとして教員集団による、援助や助言を必要とした。復帰した彼は、家族間でも耳を貸すようになっていたように、教師たちや友人の働きかけを受け入れるようになっていた。ようやく、彼の人格発達も健康な自我の部分が機能するように変化する余地をもったのである。

#### 参考文献

- 1) 国松清子 (1996) : "management" としてのスクールカウンセリング 季刊「心理臨床」9 (2) 99-103 星和書店
- 2) 国松清子 (1998) : 不登校生徒の親面接—スクールカウンセリングをmanagementして—日本心理臨床学会第17会発表論文
- 3) 河合隼雄 (編) : 1679 生徒指導とカウンセリング ミネルヴァ書房
- 4) Winnicott, D.W. : Collected Papers. Tavistock Publication, London, 1958. (北山修監訳: 児童分析から精神分析へ 岩崎学術出版社、東京、1990)
- 5) Winnicott, D.W. : Matureitonal Processes and Facilitating Environment. The Hogarth Press Ltd, London, 1965 (牛島定信訳: 情緒発達の精神分析理論. 岩崎学術出版社、東京、1977.)